

稚内北星学園大学 2016 年度入学式・式辞

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。稚内北星学園大学を代表して、みなさんを歓迎し、入学をお祝いいたします。また新入生のご家族、関係者の皆様にも心からお喜びを申し上げます。

本学は、学則第 1 条において、大学の目的を次のように定めています。

本学は、教育基本法及び学校教育法に基づく大学の教育をおこない、地域社会に貢献し、キリスト教精神の根底にある人間の自由と尊厳を重んじ平和を愛する人材を育成することを目的とする。

稚内北星学園は、このように「地域社会に貢献する人材の育成」を建学の精神として掲げながら、1987 年に稚内北星学園短期大学として設立されました。今年で 30 年目を迎えることとなります。そして 2000 年には四年制の稚内北星学園大学に改組されて今日に至っています。

建学の精神が先のように謳われたのは、稚内市が、宗谷圏域全体の発展を遂げるための不可欠な柱として高等教育機関の設立を位置づけたからです。すなわち、「宗谷の地に高等教育機関を」という“地域社会の要請”が本学の出発点でした。そのため、用地・校舎・施設等、大学設置にかかわる費用は稚内市及び地元企業が負担するという、北海道で最初の公設民営大学として設立されたのです。

では、こうした建学の精神のもとで、みなさんにはどのように学んでいただきたいのか。まずは“学ぶ”ということ一般についてお話しておきたいことがあります。

『論語』に次のような一節があります。「学びて思わざれば則ち罔^{くら}し、思いて学ばざれば則ち殆^{あや}うし」。「学んでも“思う”ことがなければ暗いままであり、逆に“思う”ばかりで学ぶことがなければ危険だ」。もう少し言い換えますと、「学んでも、その学びを自分の“思い”、つまり思想・考え方・生き方に生かさなければ暗い、視界が明るくなることはない、世界は見えない。また逆に、“思い”ばかり強くて人や書物から学ぼうとしなければ自分勝手な思い込みにとらわれ、正しい判断ができない」、およそそういう意味です。

ある大学の教員が、こんなエピソードを紹介しています。

私は一区切りの主題が終わると、学生に「どう思うか」と意見を求める。すると、「思うってどういうことですか」と応答に窮して反撃されたりする。何度きいても、これには啞然とする。彼のいい分は、「先生の講義をノートにとりました。知らないことだったので頭に入れました。それで十分でしょう」というのである。一体、思うことができなくて知ることができるのだろうか。

知識をただ頭に入れるという努力は、たいていの場合、面白いものではありません。しかし、知識を用いて何か問題を解決できたり、人との関係を豊かにできたり、あるいは世界の見え方が変わってしまったりするというのは、実はとても楽しくて、ときにスリリングな体験です。

「頭に入れました、それで十分でしょう」ではなく、問題は、知識の生かし方です。何かに生かそうとする力の源が、“思い”です。どういう方向で知識を役立てるかを決定するのが、私の価値観や人生観、思想です。それらの“思い”と切り離された知識は、“私にとって”ほとんど意味がありません。

「学びて思わざれば則ち罔し」です。

他方、強い“思い”はあるとしても、正確な知識や理解に基づかない言動は困りものです。

インターネット上では、誰かを貶めようとするバッシングは日常茶飯事です。「面白おかしければいい」という動機の人もいるでしょうが、「正義感にかられて」という人も多いはず。問題は、「バッシングしている相手が悪い奴だ」という根拠を一切確かめずに“祭り”に参加することが珍しくないということです。

また「テレビがそう言っているから」ということだけで信じ込まされている、間違った“常識”のようなものもあります。「少年犯罪は急増・凶悪化している」というイメージがその一例です。統計を繙けば、明らかに事実は逆であるにもかかわらず、その誤った前提のもとに、「子どもたちがおかしくなっているのはゲームが悪いのだ」とか「刑が軽すぎるからだ」などと議論されます。

そうした「思い込み」はいたるところにあります。私にも、きっとあります。それらは、学ぶ機会がなければ、正すことはできません。いくら“思い”が強くても、前提となる知識が間違っていれば正しい判断を下すことは不可能です。

さらに、事実の断片ではなく、全体の構造や歴史的な経緯についての認識がなければ、その現象の持つ意味が理解できないということも多々あります。

「思あやいて学ばざれば則ち殆あやうし」。

では、稚内北星学園大学における“学び”には、どのような特徴があるのでしょうか。

一つは、教員の身近で学べるということです。

規模が小さい分、教員と学生の皆さんの距離がとても近くなっています。学生同士だけでなく、学生と教員の間でも、学内にはお互いに知らない人はいないような、そんな関係の中で学べます。そこには対話があり、日常的なつながりがあり、そして「何のために学ぶのか」をめぐっての価値観の交流も生まれるはずですよ。

二つには、助け合いながら学べるということです。

学生が、一方的・受動的に講義を聞くようなかたちではなく、自ら調べ、表現するという学習形態である「アクティブラーニング」を取り入れた科目では、チームを組んで学習に取り組みます。自分たちにとって何が大切な問題なのか、まずは課題を設定し、調査し、議論し、成果を発表するという一連の過程を学生自身がチームで協力し合いながら進めます。

三つめが、地域で活躍しながら学べるという点です。

稚内や近隣自治体の子どもたちへの学習支援の機会、教員を志望する学生にとっては、自らを成長させる絶好の機会になっています。さらに、地域に取材して映像作品を制作する、イベントに自らの作品を提供する、自分たちで街のイベントを企画立案して実行する、観光振興のためのアプリを開発する、そうした活動に、学生が主体となって取り組んでいます。言わば〈街を教室に〉して、地域の人々とのつながりの中で学んでいきます。

以上のように、本学での“学び”には、知識を知識として覚えればよいということではない、まさに、“知識”と“思い”を結びつけるプロセスがたくさん用意されています。ぜひ、積極的に参加してください。

大学生時代は、長い人生の中でもかけがえのない大切な時期となります。改めてみなさんのこれからの大学生活が実り多いものでありますようお祈りして、私の式辞といたします。本日は、誠に、おめでとうございます。

2016年4月2日 稚内北星学園大学 学長・斉藤吉広